



きっかけ



kou

はじまり

子供の頃から本は読まなかった。

いや、読まなかったというのは少し違う。

読書感想文、課題図書、それらの決められた時だけ読んだ。

自分の意志に反して、あまり読書が面白いとは思わなかった。

気づけば僕は、音楽にのめり込み、ギターやベースを弾く、という青春時代を過ごした。

それはそれで楽しかった。たくさんの仲間が出来、たくさんの思い出があり、たくさんの興奮に包まれた。

時計の秒針が一定のリズムを刻むように、時代も移り変わる。

僕は大学生になっていた。

今でも覚えている。

そう、あれは大学三年のときだった。

目の前に、就活という大きな壁を控え、そしていずれはそれを壊さないといけない。

ベルリンの壁が崩壊したように、何かを積み上げ、また壊す。

この作業を僕は念頭に置いた。

ある日、いつもはいかない本屋に導かれるように行った。

一通り雑誌などを見て、ふいに目についた本があった。

それが東野圭吾「白夜行」であった。

文庫本にしては厚みがあり、脂の乗ったカツサンドを思わせた。

意識というか無意識でそれを購入した。

僕は少なからず直感を信用する。

今回もそれを信じた。

終わり

早速、家に帰って読んだ。

なにより本って、物語ってこんなに面白いのか、と思わされた。

その作品の登場人物、描写が、頭の中で鮮明に描かれた。

映画を見てるかのように、脳内にスクリーンが広がる。

物語が進み、真相が明らかにされるにつれ。背筋の凍る思いが募っていく。

僕が驚いたのは、最後まで主人公の二人の内面が一切明かされないでクライマックスを迎える。

読後、いや、数日経っても、ふとした拍子に主人公二人の物語に思いを馳せてします。

そう、余韻が消えないのだ。

それをきっかけに、僕は読書に夢中になった。

後で知ったことだが、東野圭吾という人は有名な作家さんだった。

読書が好きではなかった僕が、ここまで夢中になるということはこの人の替えはいないと思った。

プロとは、替えのきかない人物だと、この時思った。

それ以降、年間100冊を読み、今も継続している。

人との出会いが大切なように、本との出会いも大切だと感じた。

これからも素敵な文章、物語に出会えることを願って。